

# 「新しい社会運動」の美学的側面への考察

-沖縄における社会運動のフィールドワークとメルッチ再考を通して-

一橋大学大学院 森啓輔

## 1 目的

本発表は、現代沖縄における社会運動のフィールドワークにおいて提起された問題から出発し、アルベルト・メルッチの社会運動理論の再考を通しつつ、「新しい社会運動」の美学的側面について記述することの必要性とその展望について論じるものである。

## 2 方法

メルッチに関しては、これまで多くの先行研究が記されてきた（保坂・渋谷 2012、山之内 1991 など）。主に多岐に渡る先行研究に依拠しながら、それらにおいてこれまで考察されてきたことを概観するなかで、メルッチ理論の社会運動論としての位置づけを確認する。これを現代沖縄の社会運動を分析するなかで、とりわけ報告者がフィールドとしてきた東村高江の米軍基地建設反対運動を考察することで（森 2013、阿部 2011）、メルッチ理論の視座における美学的側面を考察する。

## 3 結果

メルッチの視座から現代沖縄の運動を凝視すると、「新しい社会運動」がもつ身体性を媒介点とした運動の形成が見て取れる。しかし国民国家および近代性への批判自体は、沖縄の社会運動史の文脈ではそれ以前から脈々と継続していると言える。酒井直樹（2008）の国民国家論を媒介としながら見えてくるものは、リニアで単一な物語を退けつつ、個人化 *individuation* に立脚したそれぞれの小さな物語の網の目自体が、「新しい運動」を形づくっていることである。それはメルッチが述べていた「支配コード」の転覆を可能にする反省的实践であると言えよう。

## 4 結論

メルッチは目的合理性のみならず、非合理的な実践の記述へと幅を拡げることによって、情報資本主義-産業資本主義社会における「新しい社会運動」自体がもつ近代性の根底的な反省性への記述可能性を獲得した。しかしこの近代への反省性への視座は「古い社会運動」にも編み込まれている。ナショナリズムの物語が、単一的な枠組みを必要とし、その語りが自身の高みの不動性をもって覇権を獲得するのであれば、一見「無駄」に思えるような諸実践や諸シンボル形成の重要性が浮かび上がってくる。この観点は、とりわけ「新しい社会運動」の視点から考察される現代沖縄の社会運動記述において重要であると同時に、日本本土や世界的な展開とも併せつつ、新自由主義的、国家主義的な現代における社会運動の新たな記述の可能性をも開くものではないか。

## 【参考文献】

阿部小涼、2011、「繰り返し変わる：沖縄における直接行動の現在進行形」『政策科学・国際関係論集』13: 61-90。酒井直樹、2008、『希望と憲法-日本国憲法の発話主体と応答』以文社。森啓輔、2013、「沖縄社会運動を『聴く』ことによる多元的ナショナリズム批判へ向けて-沖縄県東村高江の米軍ヘリパッド建設に反対する座り込みを事例に」『沖縄文化研究』39: 159-208。保坂直人・渋谷治美、2012、「いまを生きる社会運動の行為者-A. メルッチの集合行為論を中心に」『埼玉大学紀要教育学部』61(2): 113-126。山之内靖、1991、「システム社会の現代的位相 上・下」『思想』6・7月号。